

# DRAMA かながわ 54

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866



## 街の劇場から、そして劇場の街へ

神奈川芸術劇場準備室長

真野 純



長い不在の後、劇場がここ神奈川に、横浜に戻って来ます。2011年の1月開場に向け、神奈川芸術劇場と名付けられたその劇場の、開設準備室の眞野です。演劇連盟の皆さんへと云う事なので、ちょっと専門的な部分にも触れながら、劇場を紹介させていただきます。

運営は、御存知の県民ホールと一体的かつ相補の関係に在るものです。山下町に、県の芸術文化行政の広域拠点が、名実ともにできると思っています。老舗の旅館で云えば本館と新しく出来た別館あるいは新館と云った所でしょうか。県民ホールは2500席近くも有って、演劇や音楽劇・ミュージカル、コンテンポラリーダンス等にとっては、とても敷居の高い大きなホールです。又小ホールもオルガン等を持

ち、音楽ホールの色彩が濃い目な事は皆さんがたが良く御存知でしょう。

ですから新しく建設中の神奈川芸術劇場は、丁度其の空隙を埋める様な意味合いを持っています、客席数と云う意味でも、専門的な言葉で云う残響時間や視距離の意味でも。演劇や音楽劇・ミュージカル或いはダンス等の分野に、設計の照準を合わせています。だからといって他の物が出来ない訳ではありません、中程度の規模の物ならばバレエだってオペラだって何だって上演可能です。ただNHK横浜放送局が下層階に入るので奈落部分を深く取れず、大規模の装置転換が必要な演目は少し苦手です。ちなみに迫りや回り舞台は持っていません。

設計の照準を合わせているのは作品の規模や演目だけでは有りません。此の劇場の設計基準は世界、所謂インターナショナルスタンダードです。今に始まった事では有りませんが、世界中で演劇やダンスが同時代感を響かせ合いながら激しく流動しています。此の劇場はその流れに応じるべく意匠されました。何だか大仰な事のように聞こえるかも知れませんが、それは実は簡素な箱を実現させる事なのです。作品によって様々な機械や器具を持ち込めたり、或いは容易に外したり出来る劇場。なんだと思われるかもしれませんが、此の設計が存外難しいのです。機構設備の重装備化を極力排し、しかも限りなく制約の無い劇場を問う事、どんな作品でも柔らかく包んでしまう可塑性、それが建築としての神奈川芸術劇場の主題です。今も日々修整され続けて居ます、まるで劇場に意思がある様に、半自動的に。

劇場の建物に付いてはこれ位にして置いて、それでは肝心の何をするのかに付いて話を進めます。要約的には、県が出しているリーフレットに過不足無く十分に内容が書かれています。是非読んで下さい。連盟にどっさり送って置きます。

最初に書きましたが、神奈川或いは横浜には劇場の不在が在ると、それも長い間に亘っての不在だと。それは横浜が人工都市であるが故の人工的な不在であると付け加えてみます。日本で初めての西洋式の劇場が建てられたのも横浜山下が始まりだと聞きます。さておき此処は太平洋に向かって西洋世界に開かれた最初の街であり、横浜港から日本の近代が猛然と開始されたのです。工業化も、きっと都市化も、ドラスティックに始まったでしょう。

最初から劇場なのです此の街は。何故か非日常の強烈な目眩がします。異人さんに連れられて行くのは、いつも横浜の波止場なのですから。此の国の産業革命の担い手が全国から集まって来ます、そして出会い頭のコミュニティーを作って行きます。さぞや賑わったでしょう繁華街や芝居

小屋は。ようやく都市コミュニティーが作られた頃、関東大震災が襲います、又振り出しです。

再建された街は、此処ではコミュニティーですが、街を、賑わいを、そして劇場を取り戻します。京浜工業地帯の完成です。その頃の写真に、驚く程の雑踏と芝居小屋等が写っているのを見ると、やはり劇場が先に出来るのでは無く、街の狼狽を嗅ぎ分けるのですね劇場は。

そして戦争になります。京浜工業地帯は徹底的な空襲に会い再び壊滅します。

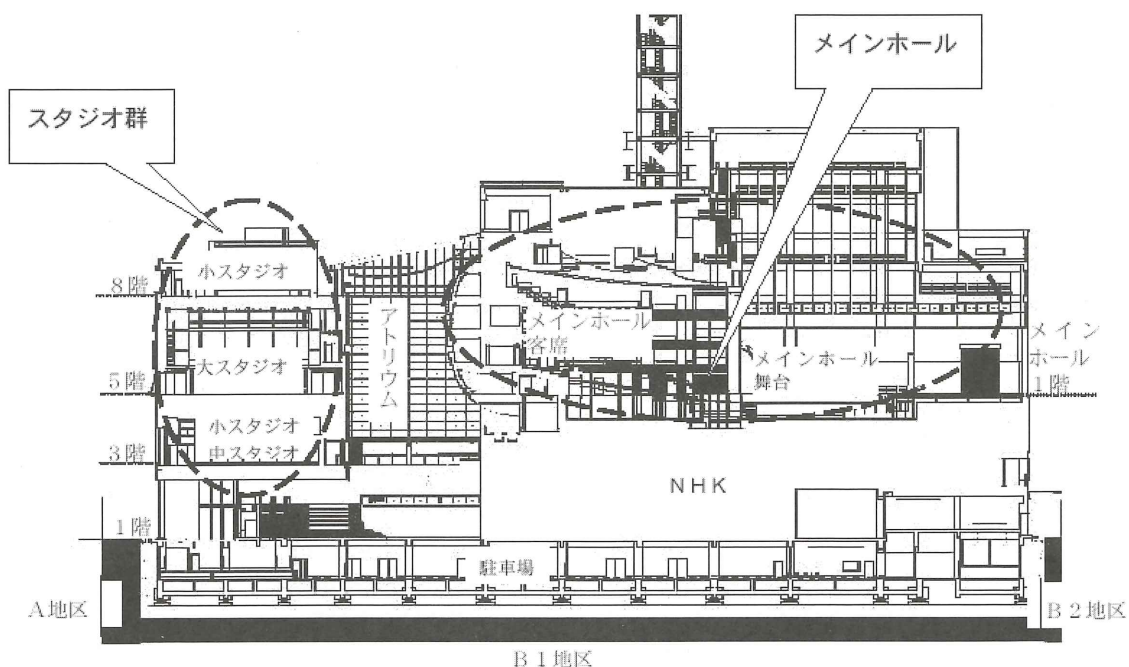
今度は開国した因縁の相手の米国の占領下に置かれます。フェンスの向こうのアメリカです。その後の事が今に続いています。少し遅れた復興は、全国に先駆けて音楽堂を作り、その他文化施設の整備を伴いつつ、芸術文化の先進県として歩み始める事になります。

そんな環境の中、神奈川では、プロと遜色の無い役者や演出家を擁した極めて自立力のある劇団が、幾つも誕生する事になります。皆さん達の先輩です。青芸や新人会、三期会等が東京の勢力であった時代、四十五年以上も前の話です。そこから日本の演劇は、東京を中心に大きな変化をします。むしろ東京だけが変化したと云うべきでしょう。オルタナティブ無しの疾走開始でした。変化が変化を作り自分を巻き込んで行く様な激変です。

東京の街からコミュニティーが消えて行く予感があるのを押したのでしょうか。その後の結末が現状です。東京だけのはずが神奈川も埼玉も負の連鎖に見舞われ、街が作り出すはずの劇場が、自分の本来のあるべき姿を描く事が出来ませんでした。

今度は神奈川芸術劇場がスイッチに成って、劇場が、街とそのコミュニティーの再成の力になりたいと考えています、賑わいを取り戻し、演劇も又力を取り戻すためにもです。

いろいろ話し合わせて下さい、宜敷くお願いします。







# 2009年度 芝居塾

## —風雲かぼちゃの馬車—

### ●風雲かぼちゃの馬車とは

風雲かぼちゃの馬車は主宰である土井宏晃のもと、演劇を愛し、演劇と正面から向き合い、日夜、演劇活動に熱き情熱を注ぎ続ける劇団です。

### ●風雲かぼちゃの馬車の目的

風雲かぼちゃの馬車は演劇を通じて社会に新たな価値観を提示することを目的にしています。

風雲かぼちゃの馬車のメインテーマは「考えるよりも感じる演劇を！」です。

頭で考えたものよりも感じたものにこそ真実があると考え創作に取り組んでいます。

「風雲かぼちゃの馬車」が生み出した真実を劇場で観客の皆様と共有できることを楽しみにしています。  
(劇団HPより)

## 芝居塾に向けて ～主宰より～

テーマは「発見する演劇」

なぜ、発見する演劇が必要か。

演劇の性質上、本番に向けて稽古するということは、言い換えると本番に向けて決まり事や約束事を増やしていくこととなります。つまり、演劇の稽古というのはそれを練習すること、体に覚えさせることとなります。

ともすると、演技経験の少ない役者やスタッフにとって演劇の稽古は単なる反復練習になる可能性がおおいにあるということです。そこには、台詞が早く覚えられる子、覚えられない子。上手く言える子、言えない子。体が動く子、動かない子が必ずでてきます。演劇が反復練習であるならば、それを上手く消化した子が上手な表現ができるということになるでしょう。

しかし、はたしてそうでしょうか。

母が死ぬ時にかかる最後の言葉に上手いも下手もありません。

そこに、人間的優劣はないはずです。

なぜならそれは真実だからです。

つまり、真実を表現しようとするならば、今この瞬間に自分が何を感じているのかを知る必要があります。

その第一歩として、自分は何に喜び、悲しみ、怒り、笑い、憎しみ、愛すのかということを発見する必要があるのです。

言い換えるならば、発見し続けるということは、探し続けるもしくは模索し続けるということです。それぞれが一人一人新しい自分を見出すために一緒になって考えていきたいと思えます。稽古場や本番で発見を繰り返すことによって人間の本質に近づけると信じています。

そして、今回扱う演目が「夏の夜の夢」です。

優れた戯曲、優れた舞台芸術には今も昔も普遍的な人間の感情、人間の関係、人間の生活が描かれていると信じています。この演目を創造し立体化することによって年代、世代、古い新しい、国、文化をこえてもなお人は喜び、悲しみ、怒り、笑い、憎しみ、愛すということを発見できればと思います。

(風雲かぼちゃの馬車 主宰 土井宏晃)

## 芝居塾に向けて ～劇作家より～

芝居塾をするということについて普段の公演との違いが二つあります。

1つは高校生と演劇を創作していくということ。

そして、もうひとつは演劇界の比類なき巨人に挑むということ。そう、その巨人とはもちろん世界で最も著名なイギリスの劇作家W.シェイクスピアです。

没後400年近くを過ぎた今なお世界中で新たな上演が行われ続け、演劇や文学といったジャンルを飛び越えた広がりを見せており、演劇を知らずともシェイクスピアをご存じの方は大勢いらっしゃると思います。

高校生の持つ新時代の感性とシェイクスピアの残した作品の持つ、人々が連綿と紡ぎだしてきた普遍的な感情の機微とを融合させるこの試みは、まさしく新しい演劇人たちの行き先を占うものとなるでしょう。

その結果いかなるものが産声を上げるのか

それをこの場で予測することはいたしません。

なぜならば、そんな予測は無意味だからです。

演劇は稽古場での人間の生み出す真実を元にかたちづくられていきます。

人間と人間の関係が真実のドラマを創作するのです。

しかしながら、今回の「夏の夜の夢」はとてつもなく野心的な作品になるだろうと期待しています。また、それだけの期待を引き出す、懐の深さをシェイクスピアの作品は持っています。

すべての準備は整った、あとは思い切り挑むのみ。

「賽は投げられた」

演劇界の行方を照らす一筋の光明となれることを願って。

(風雲かぼちゃの馬車 南瓜良成)

## <劇団蒼生樹> 稽古場での「早春試演会」芝居発表の試み



蒼生樹2008年度秋冬の活動は、恒例の歳忘れ興行を見送ったかわりに、座員鍛錬のため稽古場で「試演会」を実施。初の試みであったが「芝居をやるってどういうことなのか」再認識できたように思う。

### 「早春試演会」報告

**【ねらい】** 各自の能力喚起、稽古の延長でありながら、演劇である以上観客に見てもらふ本番という目標も欲しい。そこで、稽古成果発表の「試演会」に。

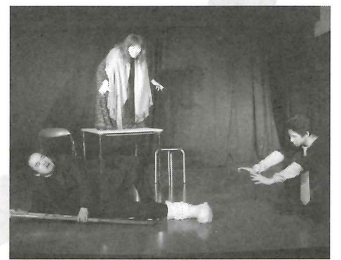
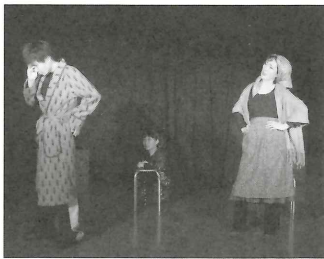
**【演 目】** 良作なのは大前提、劇場での通常公演では選びにくい①登場人物が少ない、②短い、③メッセージ性にこだわらない…という戯曲を探し、短編を組み合わせることで、参加する男女各5名が持ち味を生かし、均等に活躍できる構成を目指した。

**【稽 古】** 「せりふでテーマを訴える」タイプの作品ではないので、登場人物の造形がカギ。1編ずつが短い中での確に作品世界を伝える難しさ……演技も衣裳も小道具もまず各自で考え工夫し、演出は特定せずに「お互いに見合う」形で相談しながら作り上げていった。

**【本 番】** ヒトとモノ両面で劇団麦の会に多大なる協力をいただき(山元氏には照明までも)、想定以上の稽古場「劇場」が実現、本当に感謝！会場キャパが限られているので劇団関係者をご招待。ある意味最もコワイ観客に対して距離が近いからウソのつけない緊迫感で、手応えパッチリ(?)。(1編ずつは短いのに都合2時間超に。ご覧いただいた連盟各劇団の皆様ありがとうございました。)

秋口の作品選びから早春2月の本番まで、稽古も会場設営も、全員が「自分のこと」として芝居作りを楽しみながら取り組んだ。また、協力者や観客…いかに様々な「人の力」がないと芝居ができないかも痛感、公演規模は小さくとも蒼生樹にとって芝居の原点に帰る有意義な試みだったといえる。

(劇団蒼生樹 清水泰子)





## G/9-Project

## ラッシュアワー第12夜「炎の伽津哀烈風伝」

作・演出/仲尾玲二

2009年3月28日

於:シルクロード舞踏館

新人育成もかねて行われているというG/9-Projectの名物企画ラッシュアワーシリーズ。昨年から続けて毎月「一晚限定」で新作を上演し、今回をもって最終回ということなので行ってきた。

中華街の中にあるシルクロード舞踏館はアジアの空気を持つ不思議な空間であるが、芝居に適しているとは考えにくい。本来、ヨガ教室か個展などのために作られたのであろう、とにかく、小さな凝縮した空間なのである。しかし、弘法筆を選ばず。「シンクがたったひとつ」というシンプルな舞台が、かえって観客の想像を掻き立てる。

ストーリーは思春期を迎えた息子を温かく見守るお茶目な母親と、その家族の日常を綴ったドラマである。息子が初めて連れて

きた恋人に戸惑ったり、浮かれたり、またある時は、自分の道を歩みだした息子の後姿に幼かった頃を懐かしく回想したり、そんなこの家庭でも見られる風景を映し出す。

脚本と演出がいい。母親と息子の絶妙な会話をテンポよく関西弁で描き出す。役者に関西人はいなかったと聞いているが、相当苦労したであろう。日常の会話をきちんとさりげなく描けるところにG/9の見事な手腕を感じる。見終わったあとに大笑いしたさわやかさと家族のあたたかさが残り、気持ちよく帰ることができた。

次回公演は12月に青少年センターの大ホールで行われると聞いた。また違ったG/9-Projectが見られることを楽しみにしている。

[劇評:劇団T-cob代表 井上光希子]  
(昨年度演博参加劇団代表で今年実行委員として参加)

## 劇団麦の会

## 「新春☆麦畑でお正月+お年玉公演」※試演会

2009年1月18日 於:麦の会稽古場「麦畑」

麦の会では、三島・新谷・池浦・佐藤・片倉・川地の若手6名を〈小麦の会〉としてくくっている。こんど彼らの要望を容れて〈試演会〉をやらせることになったと聞いている。

これら若手たちの〈自発力〉は麦の会の〈演劇力〉に何を加えることになったのだろうか……。

## 1、「がんばれ真希さん」作/山口雄大 演出/三島洋一

真希さんという女性内部の二面性、良心と悪意とを役として登場させ、その両者の争いをコント風にまとめてあるが、アツという間に終わってしまったので、パス……。

## 2、「グリーンルーム」作/高橋いさを 演出/新谷美智子

小劇場の楽屋話。出番を終えた若い女優三人(片倉・川地・池浦)がいる。舞台では「男たちのララバイ」という男どもが拳銃を撃ちまくる活劇が上演されている。その効果音や怒号を聞きながら、演出家や芝居に不満だらけの女優たちが魅力的な〈女優〉になろうと奮起するまでを演ずるのだが……。

見ていていちばん気になったのは、活劇の添物として利用されてきた三女優の心の傷、それから軀をおおう徒労感、もっと深く重いのではないか……ということだ。軽口を叩きながらもそのところは隠しようがない筈だ。

そしてその身心のドン底感が作られていたら、彼女たちが立上り、奮起し、挫折の記憶を乗り越え、企ての実現に向けて走り始める、三人の女優としてのバイタリティーが輝きをもって見る者の心にとどいたのではないだろうか……。

この三人だけでなく麦の会の若手は良質のエネルギーと資質を持っているように私は見える。

もし私の指摘がひっかかるようだったら、どうしたら良かったか……を考えてもらいたい。

芝居は〈せりふ〉だけに頼って作るものではなく、〈全からだ〉で表現するものだ。そして〈ストーリー〉を伝えるだけでなく、その構造をみせるものなのだから……。 [劇評:高津一郎]

## 劇団蒼生樹

## 「劇団蒼生樹(早春) 試演会」

2009年2月15・22日各2時 於:蒼生樹稽古場

パンフのメッセージに〈稽古場は本番の舞台をイメージした、仮想舞台〉とあるが、その仮想舞台でチェーホフ、テネシー・ウィリアムズ、ニール・サイモンと米露のビックネームに取組んで、蒼生樹らしい冒険的な試演会を見せてくれた。またこの企ては、1970年代の横浜演劇を象徴する〈土曜小劇場〉を髣髴させるものがあり、上演方式の繋がりから見て、蒼生樹の活動の〈転機〉となるような可能性を感じさせた。

上演されたのは、チェーホフの短編小説から想を得た小品劇9作品だが、それを9名の役者がそれぞれ2〜3役に挑んでいて時々面白い。

トップの1作品を別にして、後の8作品は(作家)役の清水が全体の芝居を繋いでいく方式をとっている。清水の口跡が鮮やかで、舞台の進行は滑らかだった。

1、「しらみとり夫人」因業家主の部屋代催促から逃げまくる娼婦の話。この女、貴婦人を気取っているが、その実態はシラミっただり。川西の娼婦は家主の眼を盗んで、毛ジラミの痒さに頭髪を掻きむしる表現もなく、喜劇性に屈かなかった。

2、「作家」ここから後に出てくる作品を書いた作家の自己紹介と創作上の悩みなどの打明話。ほどよい作りで決めていた。

3、「くしゃみ」観劇中の偉い上司の頭に猛烈なクシャミを浴びせかけたことに拘り、その一事を悩み過ぎ動き過ぎて、心配の余り死に至る下級官吏の悲劇。海老名が帝政時代の小役人の救いのない憐れさを的確に見せた。

4、「家庭教師」理不尽な理由をつけ家庭教師の給料を減らしていく女主人。実はそれは家庭教師の従順なだけの生き方を戒める

ためのお芝居だった。だが家庭教師はその姿勢を変えようとはしない。若い荒木がその頑強さを貫徹して見せた。

5、「色魔」夫の友人で人妻専門の色魔の術中にはまり、男と夫の間で愛を引裂かれる夫人。そのギリギリの心情の告白を渡辺が見事に演じた。この試演会の白眉か……。

6、「水死芸人」料金をとって水死の芸を売る男の話。関口の男は浮浪者というよりはベテランに見えた。また勝崎の婦人だが、妙な場所でブラブラして、そのイカガワシサが面白かった。

7、「オーディション」俳優志願の若い女がチェーホフの前で〈三人姉妹〉誦んじて語り、入座試験をパスする。荒木のひたぶるな作りは良いが、せりふの方は不合格だ。

8、「弱き者、その名は…」通風の痛みでもだえる銀行頭取。銀行から金をせり取ろうとする無茶苦茶女。この両人の壮絶なぶつかり合いが、不条理劇風の逸品を生んだ。三木・川西の取組みの妙。

9、「教育 The Arrangement」性教育のため娼婦のところへ息子を連れてきたが、息子が元の息子でなくなるのを恐れて連れ戻してしまう父親の話。こんな愛情もあるのかと、ちょっとほのほの……。

※これは余談だが、(試演会で、警官・秘書・少年)を演じていた新人の〈濱本憲人〉が、3月20日「演博・蒼生樹公演・在り処」に高齢者介護のボランティア学生として登場し勝崎・三木のベテランを相手に熱い想いを持つ青年を好演した。これは〈試演会〉の成果だと思う。

[劇評:高津一郎]



# 第6回 演劇博覧会

## 大盛況で幕をとじる

第6回神奈川演劇博覧会も、のべ2800名のお客様に観劇していただき大成功に終わりました。これも青少年センターをはじめ、たくさんの方のご協力があったはじめて成し得る事です。そしてなにより出演劇団の芝居に注ぐ情熱が、演劇博覧会を魅力的なイベントにしているのだと思います。

今回は演劇博覧会に関わった方々に寄稿して頂きましたので紹介させていただきます。

\*まずは今回が前年に続き2回目の参加、演劇プロデュース『螺旋階段』代表：緑慎一郎さんの演劇博覧会への思いです。

### 「第6回神奈川演劇博覧会を振り返って」

抽選会が行われたのは2008年10月末だった。この抽選会を突破しなければ演劇博覧会への上演切符を手に入れることはできない。オークションでも手に入らないプラチナチケットになりつつある。今年で二回目の参加となる『螺旋階段』は、去年はギリギリでの抽選突破、今年はトップでの抽選突破。兎にも角にも抽選だけはドラマを作り上げてきた。

14劇団が三日間に分かれて50分以内の芝居を連続上演する。転換の都合上により大きなセットは組めない。照明もすべて他劇団と同じ照明を使用する。これは通常のホールで上演する『螺旋階段』らしい芝居とは大きく異なる演出を要求されている。去年、苦勞して脚本を書き、演出したあの日々を思い出すと右目からほろりと落ちるものがある。にもかかわらず、懲りずに参加を表明した。これは私自身が自分の苦勞とは別に神奈川演劇博覧会というひとつの大きな芝居の面白さを感じているからに他ならない。各劇団が持ち寄った様々なシーン、設定、登場人物、その全てが神奈川演劇博覧会という大きな芝居となって完成する。ここに演劇博覧会の素晴らしさがあると私は思っている。この芝居の中心にいたい。この芝居の主演でありたい。そんな気持ちを『螺旋階段』に抱かせてくれる企画なのである。今回参加した14劇団が再びひとつの舞台を作り上げることなど二度とない。だけど、一度同じ舞台に立てばそれは仲間だ。すべての仲間に拍手を送りたい。

【演劇プロデュース『螺旋階段』代表：緑慎一郎】

\*次に初の参加、湘南アクターズ主宰 郷田ほづみさんが演劇博覧会出演を通じて感じたことを寄せて頂きました。

### 「演劇博覧会感想」

関係者の皆様、第6回神奈川演劇博覧会お疲れ様でした。今回初めて参加させていただきました湘南アクターズです。



勝手がわからず、うろろうするだけの私達も、担当スタッフの導きにより、無事に公演を終了することができました。本当にありがとうございました。

参加させていただいて感じるのは、まずなによりも表現することの楽しさ、そして演劇というものが、やはり一生を通じて楽しみ、また目標を持って取り組めるものであるということ。常日頃感じていることではありながら、再確認できました。

私達の劇団にはプロを目指している者もおりますが、演劇を価値ある生涯のライフワークと捉えているメンバーもたくさんいます。

劇団に関わるスタンスは人により様々です。私の考えとしても、よりたくさんのお客様に観ていただき、一人前の劇団になるよう成長させて行くと共に、地域に密着し、地元の文化に貢献していくという目標もあります。その意味においても今回参加して、近隣にこんなにもたくさんの劇団があり、皆さんが頑張っている姿を拝見できて、たいへん刺激になりました。

テレビや映画、さらにゲームやインターネットなど私達の周りには、あえて演劇を観なくても十分に楽しめるものが溢れています。実際、劇場に足を運ばない人がほとんどだと思います。だからこそもっともっと地域の方々に観劇の素晴らしさを、そして舞台に立つとさらに楽しいということを知っていただきたいと思えます。神奈川県を演劇のメッカにする。私達の劇団に新たな目標ができました。

【湘南アクターズ主宰 郷田ほづみ】

\*最後にスタッフとして3日間とも関わった劇団麦の会岡本みゆきさんの感想です。

### 「ワクワクの第6回」

第6回神奈川演劇博覧会の受付や場内整理をしつつ、ほとんど全てのステージを観せてもらいました。こんなにたくさん観たのは今回が初めてですが、たぶん今までよりも参加劇団の「色」や「演目」や「年齢」のバリエーションが豊かだったのではないのでしょうか。

もちろん好みやレベルの問題もあるので、正直言って「ん？」と思うこともありましたが、それでもどの参加劇団にも、必ず光るものが見えました。普段、自分が目にするものと違うタイプの芝居もあるし、自分たちの劇団とは全く活動の仕方が違う劇団もあり、良い意味でも悪い意味でも新しい発見が次々と出てきて、ワクワクしながら観せてもらいました。そして、感動すら覚えた、足の踏み場も無いほどのバラシの人の多さ！

個人的にも、機会があったら一緒に芝居がしたいと思う人もいたり、どんな活動をしているのか知りたいと思った劇団もあつたりしました。交流会や打ち上げにも混ぜていただき、いろいろな



人と話をし、更に興味が深まった人や劇団もあります。

私のいる劇団は神奈川演劇連盟に所属していますが、それ以外にも県内にたくさんの劇団があって、いろいろな形で頑張っているのがわかることは、また励みにもなります。これからも、みなさんと交流しながら活動していけたら…と思ったのです。

(急な原稿依頼のため、やけに優等生的文章でスイマセン。)

【劇団麦の会 岡本みゆき】

参加劇団の方々も開催中忙しいなか、積極的に他の参加劇団を観劇して頂きました。これだけ一度に多くの劇団と交流出来る機会は、なかなか無いと思います。

たくさんの人達に演劇の楽しさを知ってもらう。そのためには、我々がこうしてお互いを知り合うところから始まるのではないかと思います。そして第7回も、きっと魅力的な舞台を観客の皆様提供出来る事でしょう。

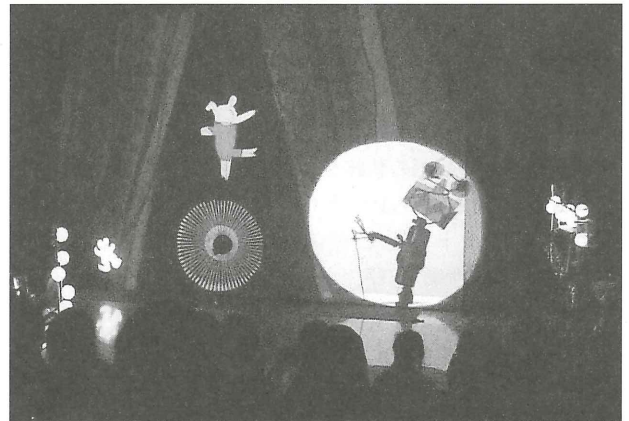
(織田)

## 春は恒例の海外劇団招聘公演

劇団：ミュージスコープ/Musiscoop (オランダ)

幻燈音楽芝居「おもしろ光のサーカス/Giant Light Circus」14:00、19:00開演 (上演40分、交流20分)

写し絵作りワークショップ15:00 (80分)



チラシを見て「即、行きたいと思った!」という観客の皆様への反応通りに、あっという間に採算ペースを超え、4月2日の青少年センター・多目的プラザは、写し絵の1つひとつがスクリーンに投影される度に自由な歓声をあげる子どもたちと、生演奏だけでも贅沢なうえに、色と空間の全てがおもしろく、美しく、楽しかったという大人たちの感想が共鳴していました。200年前のハイテク技術は今や超ローテク。それゆえにすべてに人の手が掛かり、それによって現代アートがスクリーンに引き出されてくる様は、目にも優しく心から楽しいと思わせてくれたひと時でした。今は亡きイダさんという1人のオランダ人女性によって蘇った幻燈音楽芝居は彼女の仲間によって日本を訪れることとなりました。

会場設営は青少年センターの技術の協力を得たことで、Musiscoop 曰く「私たちにとってベストな空間と客席設定」となり、普段は邪魔になりがちなあの柱さえ「ツアーに持って行きたい」とまで気に入って頂き、彼らのよりベストなパフォーマンスを引き出すこととなりました。

彼らにとって開場時刻とは開演時刻のことで、青少年センター1階のロビーでお待ちいただいたお客様は開演時刻めがけて2階へ移動、すると扉の中ではもう演奏が始まっていて、暗い会場設定にもかかわらず泣き出す子はなく(今回は2才以上有料)、慣れた導入を感じさせました。

また、2ステージ上演の間には Musiscoop メンバーによる子ども向けの写し絵作りワークショップが行われ、針金、セロファン紙、お菓子の包み紙等々を利用したユニークな作品が子どもたち1人ひとりの手で工作され、実際に幻灯機にセットして6m×4mという大きなスクリーンに写し出された上に、生演奏に合わせて人形やロボットのような物や乗り物たちを踊らせることができるという楽しい計らいもあり、参加者を満足さ

せてくれました。

今回の公演に至るまでには次のような経緯がありました。

今年で4年連続、毎春恒例の海外劇団招聘公演は、「世界同時不況」による税収不足と、横浜開港150周年の大きな動きの中で成立が危ぶまれておりました。実際、赤レンガ倉庫の利用は150周年の動きの中でコントロールされており、一時は「断念か」と思われました所、別の角度からのアプローチを頂きました。即ち、幻灯機はそもそもオランダ人の発明とされ、約200年程前に平戸から日本にもたらされたとされています。日本とオランダ両国は、2008-2009の2年間を平戸から400年、開港から150年をという2つの修好年を祝す日蘭交流年とし、現在も様々な取り組みが行われています。

Musiscoop の来日もその中の1つに位置付けられ、東京—横浜—長崎—平戸の4会場で公演するツアーが組まれました。その横浜の受入れ団体として、我々の2つの演劇祭実行委員会に白羽の矢が立ち2009年1月末に2ステージ上演に取り組むことに決めたという経緯です。

こうした取り組みの成功のもとには、子どもから大人までが楽しく海外の作品に触れることができ、異文化交流となり、安くて良心的な料金設定を貫き、新しい協力者も生みだして行くとする県内文化芸術団の連携と文化芸術への信頼があってのことで、こうした体制なくしてこのような貴重な機会は生まれてこないということを再び痛感しています。

[世界演劇祭実行委員・NPO横浜こどものひろば 大原淳司]

主催：みなと横浜演劇祭実行委員会、横浜世界演劇祭実行委員会  
共催：神奈川県立青少年センター  
協賛：在日本オランダ大使館  
：NEDERLANDS FONDS VOOR  
：MICHİ TRAVEL JAPAN 道  
協力：(財)横浜市芸術文化振興財団



## 演劇資料室だより

## 演劇資料室

～ 演劇をこよなく愛したひとりの観客の軌跡 ～

## 「市橋義雄演劇資料コレクション」のご紹介

本年1月市橋義雄様が約半世紀をかけて蒐集された演劇公演パンフレットをご遺族市橋佐紀子様を通じて一括ご寄贈いただきました。

演劇資料室ではこの資料を劇団別のファイル（たとえば劇団民藝）ではなく「市橋義雄演劇資料コレクション」として一括保存することとしました。このコレクションを一覧することによりひとりの演劇愛好家の観劇の軌跡をたどることができます。

戦後間もない1949年から1996年に亘り多くの演劇公演を観劇、その都度パンフレットを購入、愛蔵された部数は460件、観劇の内容も多様で現代劇(新劇)25件、ミュージカル16件、外国劇団の来日公演3件、商業演劇100件、歌舞伎96件、文楽、オペラ、バレエ、など17件になります。(別表参照)

ひとりの観客としてはあらゆる演劇分野をカバーして観ていて今回寄贈いただいた資料は戦後演劇の証人ともいえます。資料の多くは入手困難な貴重なものです。ただし1960年代はじまった小劇場演劇(アンガラ演劇)の資料は殆ど含まれていません。

資料室には相次いでまとまった図書・雑誌・資料をご寄贈頂いてうれしい悲鳴ですが、資料室がバンク状態で資料室担当としては頭が痛い。第二資料室の確保が新年度の重要課題です。



## 市橋義雄氏旧蔵(市橋佐紀子氏寄贈)演劇資料リスト

## ●現代劇(新劇)

劇団民藝/54、劇団文學座/51、劇団俳優座/35、劇団新人会/10、ぶどうの会/7、劇団四季/6、劇団文化座/6、演劇集団雲/4、劇団青年座/4、劇団仲間/4、安部公房スタジオ/3、地人会/2、テアトル・エコー/2、劇団七曜会/2、演劇集団NLT/2、劇団東京芸術座/2、木冬社/2、三期会/2、新協劇団/2、新演劇研究所/1、劇団同人会/1、現代人劇場/1、劇団三十人会/1、演劇座/1、こまつ座/1、無名塾/1、オンシアター自由劇場/1、つかこうへい事務所/1、劇団青俳/1、新制作座/1、早大劇団こまば/1、舞芸座/1、関西芸術座/1、夢の遊民社/1、富良野塾/1、博品館劇場公演/1、イッセー緒方オンステージ/1、岩田豊雄記念公演/1、紀伊国屋書店公演/1、新劇合同・青年俳優協同公演/1、新劇合同・チェーフ50周年記念祭(俳優座、文学座、民芸)/1、新劇合同(新協、中協)/1、新劇合同(俳優座、文学座、民芸)/1

【小計 225件】

## ●ミュージカル

博品館劇場公演/3、帝劇ミュージカル公演/8、勝田安彦ミュージカル公演/1、いずみたくプロデュース公演/1、アトリエ・41ミュージカル公演/1、劇団目覚時計/2

【小計 16件】

## ●外来劇団

モスクワ芸術座公演/1、ギリシア国立劇場公演/1、中国昆劇(江蘇省昆劇院)公演/1

【小計 3件】

## ●商業演劇

松竹・現代劇/13、SKD・松竹少女歌劇/1、東宝・現代劇/15、帝劇特別公演/7、宝塚歌劇・東京公演/21、東京喜楽座(内海突破一座)/1、松平健一座公演/1、劇団新派/14、劇団新国劇/23、劇団若獅子/1、大江美智子一座・柳家金語楼一座公演/1、萬屋錦之介一座公演/1、日本喜劇人協会発足記念公演/1、春の演劇祭/1、三木のり平奮闘公演/1、蜷川「マクベス」英国ナショナルシアター上演記念公演/1

【小計 100件】

## ●歌舞伎

松竹/64、東宝/3、前進座/10、国立劇場/12、尾上菊五郎劇団/3、中村吉衛門劇団/1、近松座/2、劇団かたばみ/1

【小計 96件】

## ●その他の公演

文楽・舞踊・オペラ・バレエ等

【小計 17件】

合計 457件

## 神奈川県演劇連盟加盟劇団の記録 (50音順)

●京浜協同劇団 ●劇団蒼生樹 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座 ●劇団川崎演劇塾 ●劇団きさく座 ●劇団こゆるぎ座 ●劇団ひこばえ ●劇団葡萄座 ●劇団麦の会 ●劇団横綱チュチュ ●風雲かぼちゃの馬車 ●プロジェクト夢樹 ●横浜小劇場 ●ラ・テラ ●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>